J-SIP-B150
M14-18

京都精華大学 PBL 教育プログラムの効果に関する実証研究
社会人基礎力、大学生活充実感を中心に

○夏世明，南了太， 中井咲貴子（京都精華大学）

１．はじめに

社会が大きく変化する中で、社会との連携が大学教育においても求められている。これまで、大学での学びの多くは座学で専門スキルや教養を身につけることが中心であったが、今後はその能力に加え、自らが積極的に自治体や企業、地域社会の問題に関心を持ち、在学期間中から社会と関わること、即ち社会人基礎力の育成が求められている。このことを受け、京都精華大学では、2021 年度より全学共通教育科目の中に「社会実践力育成プログラム」が構築された。本プログラムは 2022 年度地域や企業等との連携 PBL 教育プログラムを 60 近く用意し、社会実践力を身につけることを目指すとともに、在学生の夢に近づける機会を提供するものである。

本研究はこのプログラムの前半期の履修者を対象に、直接的教育効果（社会人基礎力）および間接的波及効果（大学生活充実感）に焦点を当てて、2 時点（事前・事後）で収集された 97 名の履修生データを用いて検証を行う。今まであまり取り上げてこられなかった芸術系・デザイン系の学生を対象に、かつ、大学経営における重要事項である学生の大学生活充実感にも着目しているところに学術的意義と政策的示唆が期待できる。

２．調査及びデータの概要

2022 年 8 月～9 月の間に本プログラムの履修登録学生に事前アンケート（紙媒体と WEB 版）を配布した結果、204 名分の回答を得た。10 月～11 月の間に、204 名の回答者を対象に事後アンケート（WEB 版）を送信し、104 名から回答があった。回答基準を満たさない 7 名を除き、本研究では 97 名の事前・事後アンケートデータを用いて分析した。調査項目としては基本属性（性別、所属、選択科目、次年度の希望プログラム、本プログラムに対する期待、等々）に加え、パーソナリティ特性、創造的態度、大学生活充実感、社会人基礎力、地域貢献意志、コミュニケーション意欲なども取り上げられている。

97 名の回答者のなかで男性学生が 19 名、女性学生が 73 名、性別不特定の学生が 5 名、約 9 割は 2 年生以下である。事前アンケートにおいては最終履修者（人数実数値：325 人[i]）での回収率が約 63%であり、事後アンケートにおいては、事前アンケート回答者での回収率が約 51%である。なお、回答者を所属学部で見ると、一番回答者が多いのはマンガ学部（31%）で、その次はデザイン学部（28%）で、3 番目は芸術学部（17%）である。性別及び所属学部の内訳は事前アンケート回答者（204 名）と全履修者（421 名）の内訳とかなり一致していることから、本研究の使用データには代表性があるといえよう。

３．分析結果

事後アンケートではプログラム参加後の満足度について「本プログラムを在学生（友人、知人、クラスメート、先輩後輩など）に薦めたいと思いますか」で代用している。表 1 はその結果である。97 名回答者のなかで、83 名は身近な人に薦めたいことから、プログラム参加満足度の高いことが推測される。

表 1．プログラム参加全体満足度の人数別

薦めたくない	あまり薦めたくない	どちらとも言えない	少し薦めたい	薦めたい	未回答
0	1	6	37	46	7

表 2．大学生活充実感における事前と事後の平均値比較

	事前		事後			
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	*t* 値（df）	平均値の差
大学生活充実感	3.35	.50	3.34	.51	.467 (96)	.01

***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05

大学教育には知識の伝授のみならず、在学生の包括的な充実感を求められている。本調査では、大対（2015）の「大学生活充実感」の質問項目を部分的に引用している。大対（2015）の研究においては交

友満足、期待感、学業満足、不安を下位概念としているが、本調査においても、これらの下位概念 10 項目を用いて合成変数「大学生活充実感」を作成した。これらの質問項目の信頼係数（事前 α=.77；事後 α=.73）であるため、この 10 項目の質問は大学生活充実感として内的一貫性があり、信頼性のある概念であると認められる。表 2 はプログラム参加前の大学生活充実感平均値（事前）とプログラム参加後の大学生活充実感平均値（事後）の比較を纏めた表である。対応のある T 検定を行ったところ、t(96)=.467, p>.10 で事前と事後の平均値には有意な差が確認できなかった。

表 3．社会人基礎力における事前と事後の平均値比較

	事前		事後			
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	*t* 値（df）	平均値の差
伝える力	2.42	.57	2.53	.57	2.304 (96)	－ .10*
働きかける力	2.56	.55	2.53	.60	.578 (96)	.03
協調力	3.18	.53	3.55	.56	4.378 (96)	－.37***
考える力	2.69	.52	2.73	.56	.961 (96)	－.04

***p<.001, **p<.01, *p<.05

プログラム参加を通して学生はどんな力を身につけているのかに関して教育効果の検証が必要になる。本調査では、大対ら（2018）の「大学生の社会人基礎力尺度」の質問項目の殆どを引用している。大対ら（2018）の研究においては伝える力、働きかける力、協調する力、考える力を下位概念としている。本調査においても、これらの下位概念の質問項目を用いて分析を行った。これら下位概念の質問項目の信頼係数は伝える力（事前 α=.83；事後 α=.82）、働きかける力（事前 α=.73；事後 α=.76）、協調力（事前 α=.81；事後 α=.83）、考える力（事前 α=.76；事後 α=.79）である。こられの質問は該当する概念として内的一貫性があり、信頼性のある概念であると認められる。表 3 は参加者の事前と事後の社会人基礎力平均値比較を纏めた表である。対応のある T 検定を行ったところ、「伝える力」（t(96)=2.304, p<.05）と「協調力」（t(96)=4.378, p<.001）においては事前と事後の平均値に有意な差が確認できたが、「働きかける力」と「考える力」においては有意な差が見られなかった。それゆえ、プログラム参加を通して参加者学生は全体的に伝達力と協調力が伸びたという教育効果があるといえよう。

４．考察

本研究は京都精華大学 2022 年度前半期 PBL 教育プログラム参加者を対象に、直接的教育効果（社会人基礎力）および間接的波及効果（大学生活充実感）に焦点を当てて、事前と事後の統合データを用いて検証を行った。まず、プログラム参加の全体満足度において、参加者の 8 割以上が身近な人に推薦したいと回答していることから、全体満足度が高いことが推測される。次に、大学生活充実感においては事前と事後で有意な差が確認できなかった。一方、大学生の社会人基礎力は、「伝える力」と「協調力」において事前と事後に有意な差が認められたが、その他には有意な差が無かった。

大学生活充実感に有意な平均値の差が無かったことは元々大学生活充実感の高い学生が PBL 教育プログラムに参加している割合が大きいことに原因があるとも推測できる。それゆえ、今回のプログラムに参加していない学生を対象に同様な調査を行うことでプログラムの参加と大学生活充実感の関係がより明らかになると考えられる。また、前半期 27 プログラムが開講され、それぞれのプログラムの履修者数と育成目標が異なっていることから、社会人基礎力においても、プログラム別に分けて詳細に確認することが今後の課題となる。

【謝辞】

本調査にご協力頂いたプログラム担当教職員、ご回答頂いた履修生に深く感謝いたします.

【参考文献】

1) 大対 香奈子:「大学生活充実感を規定する要因の検討」, 近畿大学総合社会学部紀要, 4 (1), pp.47-57,(2015).
2) 大対 香奈子・堀田 美保・本岡 寛子・直井 愛里 :「大学生の社会人基礎力測定尺度の開発」, 近畿大学総合社会学部紀要, 7 (1), pp.51-59,(2018).

[i] 履修登録者数は 421 名であったが、海外渡航や連携先などのコロナ対策で 6 つのプログラムは中止になったため、最終履修者数は 325 名である。